

# 建築家村野藤吾によって設計された 関西大学第一高等学校・中学校の建物について

西田貫人

はじめに

関西大学千里山キャンパスは、一九二二年より現在まで一〇〇年近い歴史をもっている。そのなかで建築家村野藤吾（一八九一年～一九八四年）は、千里山キャンパスの計画に大きく関わった人物である。

村野は一九四九年に大学院学舎を設計して以来、一九八〇年の関西大学第一高等学校校舎の設計に至るまで、三二年間という長い期間に亘り、四〇もの建物を設計してきた。

本稿では、村野によって設計され、現在建て替え工事が計画されている、関西大学第一中学校、第一高等学校の建物の特徴を明らかにするとともに、その価値を再考することを目的とする。

## 一．関西大学第一高等学校・中学校の開設から千里山へ移転まで

関西大学第一高等学校・第一中学校の前身は、一九一三年四月に開校した関西大学附属私立関西甲種商業学校である。この関西甲種商業学校

は、実業教育の必要性から、一九二二年の関西大学の福島学舎増築の際に設立が認可された。その後、一九二四年には高等小学校卒業生を対象に授業を行う関西大学第二商業学校（一九四四年の戦時学制改革により廃校）が開設された。

関西大学は、一九一八年公布の大学令に準拠した大学に昇格するため、一九二一年、福島学舎より広い千里山の土地を購入した。これに伴い、予科と学部が千里山へ移転することとなったが、関西甲種商業学校、第二商業学校は、福島学舎に留まった。その福島学舎であるが、一九二五年に鉄道省から東海道新幹線の拡幅高架化のため、敷地の一部が収容され、代わって大阪市から淀川区長柄中通二丁目に約二二〇〇坪を譲り受け、天六学舎へ移転することとなった。天六学舎の地鎮祭は一九二八年に行われた。学舎は一九二九年に竣工し、実際に移転したのは移転計画を発表してから三年半ほど経ってからとなった。当時の天六学舎は、鉄筋コンクリート造地下一階地上四階建、延べ面積約七〇〇〇㎡で、福島学舎の四倍の広さを有していたが、その後の学生数の増加に伴って、度々増築が行われた。

戦後の一九四七年には新学制が実施され、関西大学は大学院、大学、高等学校、中学校の経営を行うこととなった。これにより、関西甲種商業学校は新制高等学校へ改編され、天六学舎にて関西大学第一中学校、翌年一九四八年には、関西大学第一高等学校が発足した。

天六学舎で発足した第一中学校、第一高等学校であったが、その敷地は繁華街も近く、人家や工場が密集し、大阪市営の火葬場・墓地が間近にあり、教育に最適の土地とは言えなかった。また、都市部の学校ということもあり校庭が非常に狭い上に運動場は高校・中学兼用であったため、運動部はわざわざ千里山のグラウンドに赴く必要があった。

一九五〇年になると、関西大学は施設の拡張を求め、千里山キャンパスに隣接する千里山花壇の敷地を所有地とした。この地には当初、大学の各種研究所を設け、学術研究センターとする構想があった。しかし、関西大学第二部の天六移転が決定したことにより、第一高等学校・中学校は現在の校舎が建つ千里山へ移転した。

## 二．関西大学千里山キャンパスと村野建築

村野藤吾は佐賀県唐津に生まれ、早稲田大学卒業後、大阪を本拠に数多くの作品を残した建築家である。関西大学との関わりを持つようになるのは一九四九年の大学院学舎の設計以降で、一九八〇年の関西大学第一高等学校新校舎の竣工までの三一年間、施設の設計に携わった。この間、千里山キャンパスは周辺の敷地を順次買い足し、規模を拡大した。村野が三二年間という長期に渡り、ひとつの敷地で複数の建物の設計



図1 千里山花壇俯瞰図（関西大学年史編纂室所蔵）

を続けた例は他ではみられず、一九八〇年には広大なキャンパスの建築の多くが村野藤吾によって設計されたものであった。しかし、現在では大学の成長や耐震への対応など、様々な要因によって村野が設計した建物の取り壊しや増改築が行なわれており、関西大学第一高等学校、第一中学校の建物も現在建て替への計画が進められている。

### 三．関西大学第一高等学校・中学校の敷地

第一高等学校・第一中学校の校舎建設は、起伏の富んだ千里山花壇の跡地で一九五三年から始まった。この千里山花壇は、一九二一年に千里山花壇として開園した。開園当時の様子は残念ながら伝わっていないものの、開園以降、数度にわたり改修、拡張を経た姿が図面等により確認することが出来る。一九二六年から一九二七年にかけて行われた改修部分について描かれた「千里山花壇改修計画平面図」、一九三九年に拡張工事が完了した後、作成されたと考えられる広告パンフレットに掲載された「千里山花壇俯瞰図」(図1)と題された全体のイラストマップを見比べると、関西大学第一高等学校・中学校の敷地は、千里山花壇として開館した当初の場所に収まっていたと考えられる。一九三九年の段階では、園に入ってからすぐの「沈床花壇」や電車の線路沿いに観客席が設けられた「大運動場」、階段を登った先に「食堂」、「遊戯場」、「運動場」さらに登った先に「展望台」が建っていた。

村野はこの敷地に、千里山花壇時の敷地的特徴を活用しながら「高等学校校舎／現・高等学校特別教室棟(以降、高等学校校舎)」①、「景風

館」②、「第一中学校校舎」③、「高等学校理科特別教室棟／現・理科棟(以降、理科特別教室棟)」④、「高等学校新校舎／現・第一高等学校校舎(以降、高等学校新校舎)」⑤の5棟の建物を設計した。(図2)

### 四．高等学校校舎

建築面積…一二七六・一九㎡

延べ床面積…二八四九・六七㎡

主体構造…鉄筋コンクリート造・木造

規模…地下一階、地上二階

工期…一九五三年五月～一九五三年一〇月

※竣工時について



図2 高等学校・中学校エリアの村野建築

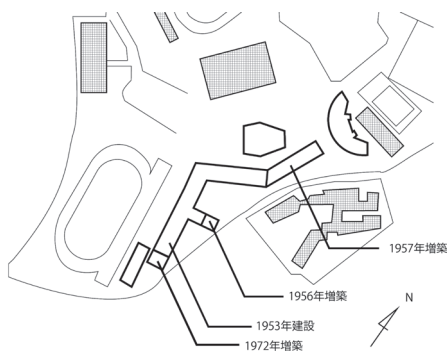


図3 高等学校校舎の配置について

一九五三年に竣工した高等学校校舎（図4）は、天六学舎から千里山へ移転して最初に建てられた高等学校・中学校の関連施設であり、花壇時代の敷地南西にあった大運動場と観客席を見下ろすように建っている。外觀は、同時期に千里山キャンパス内に建っていた大学院学舎（一九四九竣工）や大学ホール（一九五二竣工）と似た、白い壁にスパンニッシュの瓦葺きであり、鉄筋コンクリート造（一部木造）三階建の建物である。大学院学舎が建つ場所とこの校舎が建つ場所は離れているが、類似するデザインを用いていることから、村野は当初、白い壁に赤い屋根といった千里山キャンパスのキャンパス像をイメージしていたと考えられる。また、千里山花壇時代の既設階段や、東北に向かって小高くなる丘状の地形な



図5 高等学校校舎（1957年増築部分）  
（関西大学年史編纂室所蔵）



図4 グラウンドから見た高等学校校舎  
（関西大学年史編纂室所蔵）

ど、あまり手を加えておらず、もとの環境を活用した設計が行われている点についても、千里山キャンパス内における村野建築の特徴としてよく見られる。

高等学校校舎は、建設当初「く」の字型をした校舎であったが、数回の増改築が行われた。（図3）一九五六年頃に一部教室の増築が行われ、一九五七年の第一中学校校舎建設の際には、東側へと大きく増築した。敷地は東側へ向かって高くなっており、増築された建物（図5）は一階鉄筋、二階木造で屋根のデザインや高さはもとの建物に揃えられていた。また、二階は外廊下形式となっており、同年に竣工した第二学舎二号館も外廊下を設けたデザインとなっていた。その後、一九七二年にも南側に教室を増築する工事が行われている。さらに、一九八〇年の高等学校新校舎建設の際に一部が取り壊され、現在に至る。

## 五・景風館

建築面積…五一〇・七四㎡  
 延べ床面積…五三一・七四㎡  
 主体構造…鉄骨造  
 規模…地上一階（一部二階）  
 工期…一九五四年一月～一九五五年三月  
 ※竣工時について

一九五五年に竣工した景風館（図6）は、第一高等学校と第一中学校

の間の丘に建っており、不規則な六角形平面を持つ鉄骨モルタル塗に塩焼瓦葺で、高等学校校舎と同様に白い壁に赤い屋根をした建物である。体育館兼講堂として建設され、音響効果を考慮して天井を張らず、鉄筋構造がむきだしとなっていた。一九六一年に新たな体育館兼講堂が建設されたことにより、図書館に用途変更し、一九八一年に柔剣道道場に、二〇〇一年にはカウンセリングルームに用途を変更して使用されていた。その後、保健室や校長室等として使用されていたが、二〇二〇年に取り壊しとなった。

建設の際、斜面地の縁にテラスが張り出すように建てられ、(図7)先細りの柱がそのテラスを支えていた。敷地の北西には村野がデザインした街灯が設置され、その横には、力桁で支え



図7 景風館のテラス部分  
(関西大学年史編纂室所蔵)



図6 景風館 (関西大学年史編纂室所蔵)

られた浮遊感のある階段が設けられていた。  
村野は、高低差のある千里山キャンパス内での移動方法として、渡り廊下で建物を繋ぐ計画を度々行っており、一九五七年の高等学校校舎増築の際には、景風館と高等学校校舎を細い部材の渡り廊下で繋ぐ案も考えられていた。この渡り廊下は、実施されることはなかったが、一九六六年に第四学舎二号館内の渡り廊下、円神館と第二学舎二号館を繋ぐ渡り廊下では、この時に考えられていたような細い部材を用いた軽やかなデザインのものが作られた。

## 六、第一中学校校舎

建築面積…五〇八・六九㎡

延べ床面積…一四四〇・六九㎡

主体構造…鉄筋コンクリート造

規模…地上三階

工期…一九五七年五月～一九五七年一月

※竣工時について

第一中学校校舎は、一九五七年に竣工した鉄筋コンクリート造三階建、扇から中骨部分を抜いた扇面状の平面をした白い建物(図8)である。この建物は、教室一〇部屋・特別教室二部屋・補導室・医務室・倉庫等が設けられた。同時に設計施工された、第一高等学校校舎の増築部分とは渡り廊下で接続していた。一九九四年に改築され、バルコニーが室内

に取り込まれたことにより、竣工当時とは少しイメージが変わっている。

建物は、千里山花壇時代に展望台となっていた高台部分の手前に建っており、建物から第一高等学校・中学校の敷地を一望出来る。円丘にあう平面で尚且つ、正面を持たない曲面のファサードとすることによって生まれるランドマーク性を踏まえて、この様な形の建物としたと考えられる。また、千里山キャンパスには、同様の立地、形態の建物として、関西大学図書館（現・簡文館）がある。こちらは一九五五年に村野によって円形の建物が増築されたものであり、ほぼ同時期に建てられた建物である。

## 七. 理科特別教室棟

建築面積…二六九.八二m<sup>2</sup>  
延べ床面積…一〇九六.六三m<sup>2</sup>  
主体構造…鉄筋コンクリート造  
規模…地上四階



図8 第一中学校校舎（関西大学年史編纂室所蔵）

工期…一九六五年六月～一九六六年一月  
※竣工時について

一九六六年に鉄筋コンクリート造四階建の第一高等学校理科特別教室棟（図9）が、グラウンドを見下ろす第一高等学校校舎の南側に建設された。デザインは第一高等学校校舎と似た、白塗りの壁に赤い勾配屋根となっている。窓は縦長のものを等間隔に配しているが、一階は柱型が現れており、少し奥まったところに壁面が設けられている。二・三階は柱型が出ておらず、四階は窓枠を少し外に張り出すといった、村野らしいデザインとなっている。千里山キャンパス内においても第一学舎一号館（一九五五年竣工）の中庭側や岩崎記念館（一九七四年竣工）でも同様のデザインが用いられている。



図9 理科特別教室棟  
（関西大学年史編纂室所蔵）

## 八・第一高等学校新校舎

建築面積…一四七四・八五<sup>m</sup>

延べ床面積…六三二六・九一<sup>m</sup>

主体構造…鉄骨鉄筋コンクリート造

規模…地上五階

工期…一九七九年五月～一九八〇年一二月

※竣工時について

一九五七年に増築した第一高等学校校舎(図10)は、建築後二〇年以上経過した後、老朽化が激しく、

新校舎の建設が望まれた。そこで、二期に分けて工事が行われ、

一九八〇年に千里山キャンパスで最後の村野建築となる第一高等学校新校舎が建てられた。外観は全体的に暗い赤色のタイルで構成されているが、グラウンド側は屋上にまで設置されたプレキャスト・コンクリートでできた白色の手すりと白色の窓サッシが際立つデザインとなっている。プレキャスト・コンクリ



図10 高等学校新校舎 (関西大学年史編纂室所蔵)

ートによってつくられたバルコニーの手すりは、同年に竣工した村野設計の宝塚市役所にも用いられており、この建物同様、外観の重要な要素となっている。

東西に伸びる二棟のポリュームは雁行状に配置され、棟と棟の間には連絡棟が設けられている。連絡棟の足元はピロティとなっている。そのピロティの壁には白色を基調としたタイル模様があり、関西大学を意味するKDや高等学校を示すHなどの文字や地球儀、分度器、楽器などがあしらわれている。この場所は休み時間の生徒の遊び場や放課後のクラブ活動、雨の日の体育にと利用されている。村野は千里山キャンパスの円神館(一九六四年竣工)のピロティ部分について、「広場を広くしなればならないですね。そういう点、見通しがきくと、それがいいというので下をあけたんです。(中略)下の方をあけて学生がそこで休むというようなことですね。」と述べており、簡文館などの建物にも広場を兼ねたピロティを設けている。

## 九・第一高等学校・中学校の村野建築の特徴について

京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の村野コレクションに含まれている、第一高等学校新校舎に関する図面(AN5160-70)に以下の計画条件が書かれている。

- 一. 現在の緑をできるだけ残す
- 二. グラウンドは現状のまま残す
- 三. 正門からのアプローチを変更しない(一部道路 階段のつけかえを

生じる)

- 四、既存建物からの距離を確保する  
五、南向の教室を多く確保する

- 六、現在の校舎を使用しながら改造工事を行う(工事は二期に分ける)

上記一・二・三の条件について注目すると、もとの環境の保存活用に対する強い意識が伺われる。丘陵地に建つ千里山キャンパスの敷地内には、小高い丘のようになっている場所や、崖地のような場所が多く含まれている。その中で村野は、「ブルドーザーを入れるのは最小限にした<sup>②</sup>」とよく言っていたそうであり、設計を行うにあたり大掛かりな造成をできるだけ避け、周りの環境と建物の関係性を考えたデザインを心掛けていたと考えられる。第一高等学校・中学校のエリア内においても、この意識がデザインに強く反映されている。

また、三の緑について、村野は「木が育って、陰になってくると、いくらそこに潤いができて救われるわけです<sup>③</sup>」というように述べており、千里山キャンパス内の建物の確認通知書には「敷地内に必ず植樹のこと」と印がよく押されており、非常に重要視していたことがわかる。

千里山キャンパスの建物は、しばしば他大学に比べ、建築の統一性や様式性がないといった話を耳にする。確かに本稿で取り上げた五つの建物が建つ狭い範囲で考えても、形体や様式といった統一感是一部で見られない。しかし、そのような多様な建物を一つ一つみていくと、光を反射するような面の取り方をせず、柔らかく細かな陰をつけるような仕上げやデザイン、緑についての考え方、高低差の多い丘陵地での敷地の読み取りなどは共通しており、千里山キャンパス内で初期の高等学校

新校舎から末期の第一高等学校新校舎に至るまで、長きにわたり一貫して学生への心理的影響を考えているという特徴がみられる。

## おわりに

関西大学千里山キャンパスは、二〇一八年にDOCOMOMO Japanに建築群として認定され、群としての知名度は高くなったが、関西大学第一高等学校・中学校の建物の特徴や概要については、とくに知られる機会が少ない場所である。

そこで、本稿は、関西大学千里山キャンパス内に存在する第一高等学校・中学校の村野建築についての概要を明らかにした。このエリアは、千里山キャンパス内で村野の初期作品と最後の作品が並んでおり、村野の年代によるデザインの変化と、不変して続く建築思想がわかる意義深い場所である。近年、村野建築の評価は高まっており、未だに高い人気や注目度を持っている。その一因として、ヒューマニズム的思考が設計の中にちりばめられており、利用者が無意識に居心地の良さを感じるデザインとなることが考えられる。しかし、そのような小さなデザインは日常の中で気づかれにくく、村野建築は取り巻く環境や求められる機能によって次々と建て替えられている。そのような中でも、千里山キャンパス内には、現在も半数近くの村野建築が存在しており、村野建築の特徴や技術、思想を後世に伝えるために文化価値を再考するとともに、千里山キャンパス内において今後計画される建物に関して、造成や素材感など、村野が築き上げてきた設計に対する、考えやコンセプトを引き



継いだ設計が行われることを願う。

レクシオン」から見る関西大学の建築——図面の特徴と設計過程について——

参考文献・注釈・図版出典

- ① 川添登著 橋寺知子解説「再録 竹中工務店「approach」特集 学校建築 関西大学を中心に 村野藤吾氏にきく 一九六五年春号所収」／関西大学年史紀要 第二六号 一三頁／二〇一九年
- ② 川道麟太郎「関西大学における村野藤吾の建築とその後」関西大学博物館紀要一〇号 二〇九頁／平成一六年
- ③ 川添登著 橋寺知子解説「再録 竹中工務店「approach」特集 学校建築 関西大学を中心に 村野藤吾氏にきく 一九六五年春号所収」／関西大学年史紀要 第二六号 一四頁／二〇一九年
- 関西大学年史編纂委員会「学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌」／学校法人関西大学
- 関西大学百年史編纂委員会「関西大学百年史 通史編 上巻」／学校法人関西大学
- 関西大学百年史編纂委員会「関西大学百年史 通史編 下巻」／学校法人関西大学
- 西田佳代「平成5年度3月修士論文／関西大学における村野藤吾の建築」
- 山本修平「平成18年度3月期論文／村野藤吾の関西大学における初期作品に関する研究」
- 三村健二「平成17年度3学期論文／消失したのから見た関西大学千里山キャンパスの変遷」
- 佐川拳太郎「平成27年度3月修士論文／京都工芸繊維大学所蔵「村野コ

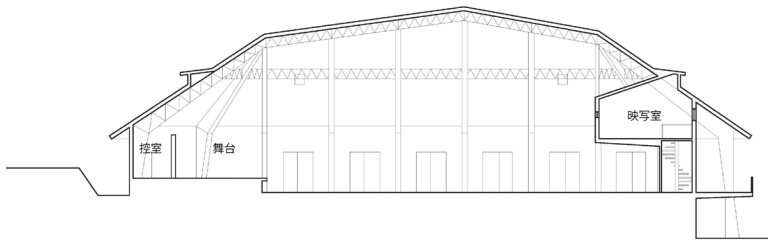


图11 景風館 A-A' 断面图

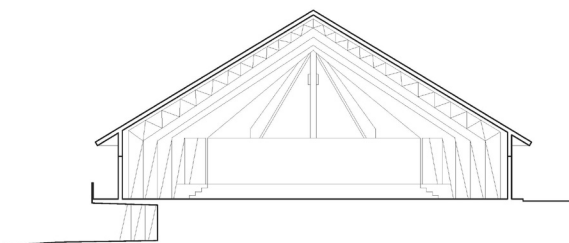


图12 景風館 B-B' 断面图

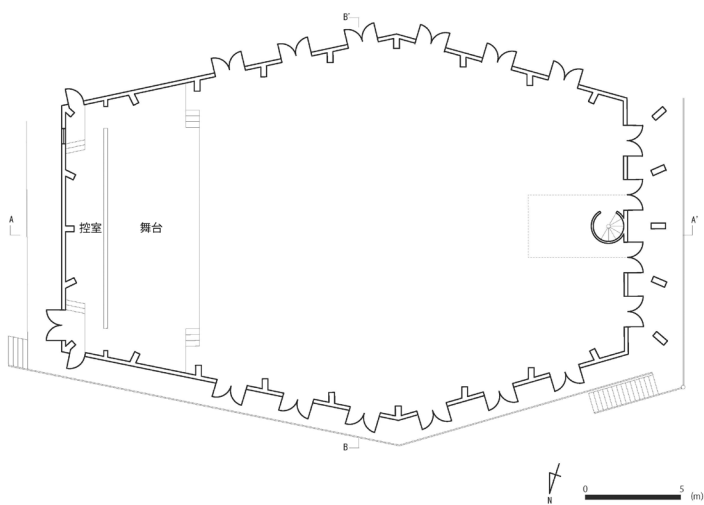


图13 景風館 平面图